

第69回全国植樹祭開催記念「“もり”がたりシンポジウム」

日時 平成28年2月27日(土) 14:30～16:40

場所 福島県文化センター 小ホール

基調講演

「海岸防災林の働きと全国植樹祭について」

講師 東京大学名誉教授 太田 猛彦 氏

森林はいろいろな働き＝森林の多面的機能を持っており、森林・林業基本法においても、森林整備の第一目的は“森林の多面的機能の持続的発揮”とされている。

森林のはたらきの第一は環境保全であり、環境の要素となっている。森林は人間が誕生する前から存在し、日本人にとって極めて重要な資源として人々の営みを支えてきた(縄文文化は最も発達した狩猟採取民族文化であった、江戸時代は3000万人の営みを支えてきた)。

森林の多面的機能は、森林の原理(環境原理、物質利用原理、文化原理)として整理されるが、環境原理と物質利用原理はトレード・オフの関係にある。

多くの国民が森林は減少していると思っているが、過去半世紀、森林の面積は変化していない。また、森林の量(体積)は2倍半に増加している。

日本人は古代から木材の性質を知り尽くし、森林資源を利用してきた。1950年代まで、森林を伐採し利用する里地・里山システムによって山地や里山が荒廃していった。その結果、土砂災害と洪水氾濫が多発するようになったため、江戸時代からは国土保全策が実施され、明治時代には治水三法(森林法、砂防法、河川法)が制定された。また、海岸では飛砂を防ぐため海岸防災林の造成が進んだ。20世紀後半になると治山・砂防技術の発達や造林の推進が起り、さらに燃料革命・肥料革命が起って人々が森林を活用しなくなると、森林の回復が進んだ。

平成の現在、日本の森林は400年ぶりの緑を回復しており、森づくりの中味は転換している(はげ山に植栽→循環資源として使用)。森林資源充実の影響により、生態系の変化、土壌侵食様式の変化、水循環の変化が起っている。木は植えるものであり、伐ってはいけないものと思っている人たちが多いが、木は成長するものであり、伐採が豊かな森づくりのはじまり。「護る森」と「使う森」を区別して森林をゾーニングし(市町村森林整備計画)、適切な管理を行う。森を守りながら、木を伐って使うことが肝要。

海岸林のほとんどは、飛砂を防ぐために17世紀以降に植えられた人工林であり、防災機能のほか多面的機能を持つ。海岸林には、津波の勢いを弱め漂流物の捕捉する津波減災機能があり、林帯幅が広ければ漂流物の捕捉効果が高まる。海岸防災林を再生するにあたっては、林帯幅は出来る限り広くし地下水面2mまで盛り土する。

1950年、全国植樹祭第1回のテーマは「荒廃地造林」であり、お手植え主要樹種はヒノキ・クロマツ・アカマツ。1960年代は「拡大造林」、1970年、第21回大会は「後継者の森」造成と変遷し、1980年代の主要樹種はスギ・ヒノキ。平成になると多様なテーマ、多様な樹種となっている。

森林が豊かになった現代に木を植える意味は何か、私たちはなぜ木を植えるのか。荒廃山地(自然災害で破壊された跡地)に木を植えるのは植樹祭の原点である。

南相馬市の海岸防災林で植樹祭を開催することは、私たち日本人が植樹祭の原点に立ち戻り、森林の大切さ、特に防災機能・国土保全機能の大切さについて改めて理解を深めるといふ重要な意味がある。

パネルディスカッション

「豊かな森林を次世代へ引き継ぐために～本県で全国植樹祭を開催する意義～」

コーディネーター	福島大学経済経営学類准教授	沼田 大輔 氏
パネリスト	相馬地方森林組合代表理事組合長	武澤 治平 氏
	ふるさと再生、菜の花、黒松植栽プロジェクト代表	柳澤 實 氏
	第21回全国植樹祭参加者	山本 壽美子 氏
	(公社)福島県森林・林業・緑化協会常務理事	渡邊 裕樹 氏

(沼田氏)

パネリストお一人ずつ、自己紹介と森林との関わりについてお話し願いたい。

(武澤氏)

相馬地方森林組合は南相馬市、相馬市、新地町の山林整備を行う組合であり、海岸防災林造成事業、福島県森林再生事業に取り組んでいる。

(柳澤氏)

相馬市役所に勤務していたが、林業関係に従事する期間が長く、林業普及員の資格を取得した。東日本大震災の津波により白砂青松の森がなくなったのを目の当たりにし、何らかの形で少しでも緑を取りもどしたいと思い、団体を立ち上げた。

(山本氏)

猪苗代町天鏡台で開催された第21回全国植樹祭で皇后陛下介添えという貴重な体験をさせていただいた。昨年は新嘗祭に納める献穀米を栽培し、天皇皇后両陛下とお話する機会をいただいた。また、北塩原村で行われた植樹祭では、孫が桂宮様の植樹の介添えをした。

(渡邊氏)

緑化協会では緑の募金を活用した県民参加の緑化活動を推進する事業、担い手となる緑の少年団の育成、海岸林の再生に企業や森林づくり団体等が参加するためのコーディネーター等を行っている。特に全国植樹祭については、福島県との協同提案者となっており、ふくしま復興・未来の森づくり基金を創設し、県の森林づくり活動を充実・拡大していこうと取り組んでいる。また、企業等協賛の募集活動も行っている。

(沼田氏)

みなさんが子どもの頃、人と森林はどのように関わっていたか、また現在の状況はどうなっているか。

(武澤氏)

昔は、山林は薪や炭を提供する“燃料の山”であった。雑木林を伐ってそこにスギを植林してきた

が、50～60年経ったいま、伐期を迎えている。

こうした山林も、原発事故により多大な被害を被ったが、ふくしま森林再生事業により、手付かずだった森林を整備するとともに、放射性物質の流出を抑えるため丸太筋工により泥水を下流に流さないように取り組んでいる。

(柳澤氏)

小学校の頃は、授業の一環として村有林から薪を背負って登校するくらい、燃料は山から取ってくるものであったが、現在はすっかり依存度が低くなった。

震災により海岸防災林が流出してしまったが、ありがたさは失ってはじめてわかるもの。官民一体となって再生していかなければならない。

(山本氏)

自分が子どもの頃は父の炭焼きを手伝ったり、薪をとったりしていたが、私の子どもたちはほとんど山に入らない。山林から得られる収入も期待できなくなり、自分自身もすっかり山に入らなくなった。

(渡邊氏)

自分が子どもの頃は山に入るのは当たり前であったが、いまはそうではない。もともと都市部に住んでいる子育て世代やその子どもたちに、山に興味・関心を持ってもらうことが重要である。緑化協会でやっている緑の少年団の取組がひとつのきっかけになるのではないかな。

原発事故の影響で山林に入ることすらできなくなり、人と森林の関わりが希薄になっている状況になった。海岸防災林は津波で失われており、都市部の人間から見てもその被害の大きさは明らかであるが、内陸部の森林は、放射性物質の影響があっても風景は変わらないので、深刻さを理解してもらえないことが残念。林業関係者やふるさとに帰れない方、農山村に暮らす方にとっては大きな問題なので、なんとかしなくてはならない。

(沼田氏)

第69回全国植樹祭について、何を期待するか、それぞれの活動にどう生かしていくかという観点で御意見をお願いしたい。

(武澤氏)

大震災以降、被災地で初めての全国植樹祭であり、非常に名誉なこと。再生・整備された海岸防災林をはじめ、本県の復興状況を見てもらうことは、福島県の復興を発信し風評を払拭する貴重なチャンスであると考えます。

全国植樹祭の終了後は、多面的機能を持つ緑豊かな海岸防災林を育てていきたい。

(柳澤氏)

全国植樹祭が開催されて、それで終わりということではいけない。植えた後の保育、施肥、下刈りや病虫害防除等について、地域住民が一体となって末永く見守っていくことが大事。全国植樹祭終了後、5年、10年の節目にイベントを行って、自分が植えた木の成長が見られたらいい。地域住民の憩いの場になればいいと思う。

(山本氏)

全国植樹祭は、大震災により被災した本県の森林を再生し、未来へ継承する取組が活性化する契機となる。本県への支援に対する感謝の気持ちを発信する大切な場となることから、開催地だけでなく全県的に盛り上げていくべき。

少しでも子や孫に山林に関心をもってもらえる機会となればいいと思う。

(渡邊氏)

福島県は、10年前に「森林文化のくにふくしま県民憲章」を制定した。大震災によって森林を取り巻く環境は変わったが、それにも負けず県民一丸となって森林再生に取り組んでいる。海岸防災林についても、防波堤や植栽基盤等の造成が進められ、復旧が実感できるようになってきた。

かつてのような森林環境を取り戻すには長い時間がかかるが、そのための人材育成が何より大切であると考えている。緑化協会としては、全国植樹祭を森林づくりのスタートと捉え、森を守り育てる子どもたちの育成に力を入れていく。

全国植樹祭では、「森林文化のくにふくしま」を取り戻すため、県民が一丸となって森林再生に取り組んでいる姿を紹介したい。また、参加者には海岸林の役割・大切さを学んでいただきたい。

(沼田氏)

全国植樹祭に向けていろいろとイベントが実施されると思うが、昭和の森に行くツアーがあってもいいのではないかと。当時植樹をされた方が再び訪れることによって、より関心が高まるとおもう。

福島県の森林は東日本大震災により甚大な被害を受けたが、全国植樹祭が開催され、県内各地でイベントが開催されれば県民の活力になるし、国内の注目を集めることにもなってこれまで受けてきた支援への感謝を発信できる。

また、海岸防災林の役割、人と森との関係、担い手の育成を考える意義深いものとなり、「森林文化のくにふくしま」を取り戻す絶好の機会ともなるだろう。

[質疑応答]

(会場より)

最近になって生物多様性や生態系サービスという新しい考え方が出てきている。生物多様性等の新しい考え方に対し、全国植樹祭でどのようなアクションができるのか考えがあれば御教示いただきたい。

もう一点は提案になるが、全国植樹祭だけで終わらないように、森の恵みである木を伐る体験をやってみたいかがかか。子どもたちは木を植える機会はあるかもしれないが、大きい木を伐る機会はなかなかないと思う。森林資源の活用の観点で企画していただければ。

(沼田氏)

毎年、木を伐りに学生を南会津町に連れて行っている。ノコギリで木を1本切るのはとても大変だが、それがいい経験となり、とても勉強になっている。植樹祭と並行して間伐祭のようなものができるとおもしろいと思う。

(太田氏)

植えるところで生物多様性を考えるのは難しいが、育てるところでは下草をあまり刈らないようにする等の対応はあり得る。

森林の多面的機能は林業も含めて発揮されなければならない。生物多様性を保持するためには、管理だけ行って使用しない森、コアゾーンの周辺にバッファゾーンを設けなければならないが、さらにその外側に林業を行う地域があれば、それもバッファゾーンになっている。

生物多様性にはいろいろな見方があるので、現場での生物多様性と、福島県全体でどこを保護し、どこを利用するのか整理していることを知ることも、生物多様性を大事にすることにつながると思う。